No.19
2007.Sep.

©東京マラソン

イベント学会 2007年度研究大会・総会

スポーツイベントが都市にもたらすもの

Contents

大会趣旨／プログラム／開会挨拶 野川春夫 …… P2~3

基調講演 …… P4~5
『2016年東京オリンピックの意義』河野一郎

パネルディスカッション …… P6~8
『スポーツイベントが都市にもたらすもの』
野川春夫／佐々木秀幸／犬飼基昭／山口泰雄

特別講演 …… P9
『スポーツイベントと都市政策』堺屋太一

総会報告 …… P10~11

インフォメーション …… P12

イベント学会会報「イベントロジー」
EVENTOLOGY

大会趣旨
2007
イベント学会
研究大会

スポーツイベン

成熟社会での大規模スポーツイベントは、都市にいったい何をもたらすのか。世の中の活発な議論を触発していくために、各界の代表者に様々な観点から語っていただいた。

1st stage

公共投資の時代

大規模なスポーツイベントは、かつて国家の威信、都市の威信を示す重要なイベントだった。開催地は、オリンピックなどを契機に、高速道路、空港整備、上下水道をはじめ社会基盤の整備にも力を入れた。

2nd stage

スポーツの産業化の時代

インフラが整った国家や都市にとってスポーツイベントは娯楽の一つ。補助金にたよらず、イベントの商品化を目指す事が開催のポイントになってきた。そこで、主催者は、スポーツイベントの価値をあげ、できるだけ広告料や放送権料を得られるように工夫するようになった。

2007年度研究大会・総会プログラム

12:30 **開場**
司会進行：宮木　宗治　イベント学会理事

13:00 **開会挨拶**
野川　春夫　大会実行委員長(イベント学会理事)

13:05 **第1部 基調講演**
スポーツイベントが都市にもたらすもの
～2016年東京オリンピックの意義～
河野　一郎
東京オリンピック招致委員会　事務総長

14:00 **第2部**
パネルディスカッション
「スポーツイベントが都市にもたらすもの」
～世界の都市にみる事例～
【モデレーター】 野川　春夫　順天堂大学教授
【パネリスト】 佐々木秀幸　東京マラソン事務総長
犬飼　基昭　Jリーグ専務理事
山口　泰雄　神戸大学教授

15:30 **特別講演**
「スポーツイベントと都市政策」
堺屋太一　イベント学会会長

16:20 **2007年度総会**

16:50 **懇親会**

18:30 **散会**

トが都市にもたらすもの

3rd stage

都市の未来像を示す

世界が注目する大規模スポーツイベントは、「新しい都市のあり方」を提案する壮大な実験場。開催地には、環境問題、治安問題、貧困問題、ゴミ問題をはじめ、成熟都市が抱える問題を解決するユニークな都市づくりの視点が求められる。

あらゆるイベントを学術的に研究するのがイベント学会です。今回は、「都市での大規模スポーツイベントの効果」をテーマに研究大会を開催しました。

これまで大規模スポーツイベントの多くは、公共投資も含めて経済効果の面から語られてきました。しかし成熟した都市や国家にとって、「大規模スポーツイベント」のメリットは、経済効果にとどまりません。都市の連帯感、新たな地域コミュニティ、ボランティア組織、素晴らしい感動をはじめ、様々な豊かさを与えてくれます。

最近では、2月18日に実施された「東京マラソン」が、大規模スポーツイベントと都市との関係の研究対象として、格好の素材を提供してくれました。また、東京都は、2016年オリンピック開催地として誘致に名乗りをあげました。

すでに成熟した都市で、大規模イベントを開催した場合、いったい何がもたらされるのか。広く社会で議論を触発していく呼び水になるよう、各界を代表する方々に語っていただきました。

開会挨拶

PROFILE
のがわ・はるお

東京学芸大学教育学部卒業。オレゴン州立大学教育学部（スポーツ社会学）大学院博士課程修了。1998年から順天堂大学スポーツ健康科学部教授。日本生涯スポーツ学会会長、日本スポーツクラブ協会理事、東京オリンピック基本構想懇談会副座長などを兼任。『改訂 生涯スポーツ実践論』（編著）、『オリンピックの汚れた貴族』（監訳）などがある。

野川春夫　大会実行委員長／イベント学会理事

「知名度があがる」「イメージアップに繋がる」「観光資源になる」——。21世紀に入って都市におけるスポーツイベントの役割は広がりを見せると共に、重要度を増しています。そんな中、2014年のオリンピック冬季大会がロシアのソチに決定いたしました。結果として、2016年のオリンピック夏季大会が欧米で開催される可能性が低くなり、「東京オリンピック」の誘致が俄然、現実味を帯びたわけです。また本年8月に大阪で世界陸上選手権が開催されるのは、周知の通りです。こうした背景を踏まえて、今回のイベント学会研究大会のテーマは『スポーツイベントが都市にもたらすもの』としました。スポーツイベントの機能と役割、これからの可能性と魅力などについて意見を交わし、議論を深め合いたいと思っております。

基調講演

2016年東京オリンピックの意義

福岡との争いの結果、2016年の夏季オリンピックの立候補地に決定した東京。早くも海外の候補地との招致合戦が始まっている。東京にとって、オリンピックを招致する意義とは何か？

レガシーを残せるコンセプトを発信できるか

先日、シドニーオリンピックのメインスタジアムがあるオリンピックパーク周辺を視察しました。オリンピック開催前は産廃処理場に過ぎない場所でしたが、今では、スポーツに限らない多様なイベントや産業が集まる一大都市として発展。快適な居住空間としても整い、見事に繁栄しています。

「オリンピックによって、都市がどう変わるのか」。開催地の選定において、ＩＯＣが最も重視する点は、「レガシー（遺産）」です。レガシーは、スポーツ施設や交通インフラのような目に見えるものだけではありません。開催都市のイメージ向上、コミュニティの醸成といった「目に見えないレガシー」も含まれます。

このようなレガシーを残せるコンセプトを発信できるかどうかが、2016年オリンピックを東京に招致する一番の鍵といえるでしょう。また、ＩＯＣがレガシー同様に重視する「環境問題への取り組み」「大会コストの抑制」にも留意しなければなりません。

東京オリンピック招致委員会 事務総長

河野一郎

PROFILE
こうの・いちろう

1946年生まれ。東京医科歯科大学卒業後、筑波大学講師、助教授を経て、1999年教授に就任。日本のスポーツ医学の中心的存在で、ソウル五輪からアトランタ五輪まで3大会連続で日本選手団の本部ドクターを務める。2001年（財）日本オリンピック委員会理事に就任。アンチ・ドーピング委員会委員長を兼務。2006年東京オリンピック招致委員会事務総長に就任。

水と緑の回廊で包まれた美しいまち東京の復活

それでは、どんなコンセプトを発信すべきか。昨年８月の国内立候補都市選定の時に発表した「開催概要

東京オリンピックがもたらすもの

下記は石原都知事が掲げた「10年後の東京」。
オリンピック招致が実現すれば、
その実現はぐっと現実味を帯びる。
もちろん経済波及効果も期待できる。

① 水と緑の回廊で包まれた美しいまち東京を復活させる
② 三環状道路により東京が生まれ変わる
③ 世界で最も環境負荷の少ない都市を実現する
④ 災害に強い都市をつくり首都東京の信用を高める
⑤ 世界に先駆けて超高齢社会の都市モデルを創造する
⑥ 都市の魅力や産業力で東京のプレゼンスを確立する
⑦ 意欲のある誰もがチャレンジできる社会を創出する
⑧ スポーツを通じて次代を担う子どもたちに夢を与える

東京オリンピックの経済波及効果
（予測）

◎生産誘発額	2兆8342億円
―（東京都内）	1兆5676億円
―（その他の地域）	1兆2666億円
◎需要増加額	1兆2677億円

※オリンピック関係者や観客の移動、宿泊等に伴う支出や、一般家庭の電気機器、その他の物品の購入費等が含まれる。
※道路等のインフラ整備費を含まず。インフラ整備費を算入した場合は、これ以上の経済波及効果となる。

ウォーターフロントを活用し、うるおいのある水辺空間を創出する

東京オリンピック　招致スケジュール

2007年５月
立候補受付手順書　発表

2008年１月
申請ファイル提出

2008年６月
正式立候補都市承認（５都市程度）

2009年２月
立候補ファイル提出

2009年４～５月
IOC評価委員会視察

2009年10月
IOC総会・開催都市決定

TOKYO●2016
APPLICANT CITY

2016年の東京オリンピックの招致ロゴ。コンセプトは「結び」。結びを象徴する日本の伝統的意匠である「水引（みずひき）」をモチーフにしている

2016年夏季オリンピック立候補都市（見込み）

東京（日本）、シカゴ（アメリカ）、
リオデジャネイロ（ブラジル）、ドーハ（カタール）、
マドリッド（スペイン）、バクー（アゼルバイジャン）

計画書」では、次のコンセプトを打ち出しました。

「世界一コンパクトな大会」
施設が集積した東京のメリットを生かし、都心の半径10km圏内に、競技施設や選手村を配置。既存施設を活用することで、コスト抑制効果も大。

「環境を最優先した大会」
ウォーターフロントに、メインスタジアムと選手村を新設。うるおいのある水辺空間を創出することで、緑と水に囲まれた大会を実現。選手村ではクリーンエネルギーを活用。閉会後はスポーツが生活の中に溶け込む新しい形の都市として生まれ変わる。

「先端技術を活用した大会」
太陽光発電を始めとしたクリーンエネルギー、ユビキタス、ロボットなど、日本の科学技術の粋を披瀝。

まだ漠然としていますが、「レガシー」「環境への取り組み」「大会コスト抑制」の３点はおさえている。これを元に詳細を詰めることが、当面の課題でしょう。

これらのコンセプトは、都知事選で石原知事が掲げた公約「10年後の東京」に合致しています。「水と緑の回廊で包まれた美しいまち 東京を復活させる」「世界で最も環境負荷の少ない都市を実現する」「三環状道路により東京が生まれ変わる」…。招致に成功すれば、その公約の実現がぐっと現実に近づきます。これは東京にとって大きな意義といえるでしょう。

支持率を80%台に乗せることが目標

このように発信力のあるコンセプトを掲げることも大切ですが、ライバル都市と戦うには、「国内の招致活動を盛り上げること」も重要です。

開催都市の決定は2009年10月ですが、その前の２月にＩＯＣが世論調査をし、市民の支持率を調べます。それまでに支持率を高めないと、まず勝てないでしょう。先日決定した冬季オリンピック開催地の国内支持率は、ロシアのソチでは80数%、次点だった韓国の平昌は90%を超えていました。最低でも80%台には乗せたい。そのためには、東京だけでなく、国内外を視野に入れ、さまざまなキャンペーンを展開する必要があるでしょう。

国内外でキャンペーンを成功させるには、国内におけるスポーツイベントの地位を向上させることが不可欠です。ここ数年、スポーツに対する国家予算はまったく伸びていません。バックアップを得られるような働きかけにも取り組んでいきたいと考えています。

「スポーツイベントが

ボランティアや市民参加が不可欠となってきた21世紀のスポーツイベントは、都市に一体何をもたらすのか。マラソン、サッカー、オリンピック、それぞれの成功例からスポーツイベントの新たな可能性を探る。

Panel discussion
パネル ディスカッション

眠っていた下町的人情を呼び覚ました東京マラソン

野川：2016年のオリンピック誘致に向けてその活動がいよいよ本格化する中、「スポーツイベントが都市にもたらすもの」というテーマで、スポーツイベントが持つ新たな可能性について大いに語っていただきたいと思います。

それでは第一回東京マラソンの事務総長をされた佐々木さん、よろしくお願いいたします。

佐々木：東京マラソンは東京都と競技団体の日本陸連との主催です。東京都は東京の地域活性化、そして成熟した観光都市としての東京を世界にきちんとアピールしよう、という目的。日本陸連はマラソンを通して愛好者を超えた市民への陸上競技の普及が目的で開催しました。

最初から3万人もの人を集めてマラソン大会を開催するのは、これまでに前例のない試みです。世界的な市民マラソンのNYシティマラソンでさえ、第一回の参加者はたったの127人だったそうです。それで完走したのが55人。いきなり世界のメジャーマラソンに並ぼうとしたのですが、果たして3万人もの競技運営はできるのか。交通規制はできるのか。事故・安全対策は大丈夫か。正直のところ不安はいっぱいありました。それらの課題をクリアするために世界での大型市民マラソンの視察と、それに基づく分析を重ね、警察関連の協力もとりつけて、これ以上ないというほどの万全の体制で本番に備えたつもりです。

いよいよ迎えた本番は、あいにくの冷雨でしたが特に大きな事故もありませんでした。ランナーの完走率も97%と驚異的な数字を残すことができ、おかげさまで大成功であったとの大方の評価です。

ではこの東京マラソンは、東京という地域に何をもたらしたのでしょうか。今回強調したいのは、その「目に見えない効果」です。例えば沿道で応援した観客の方々から、このような便りを頂きました。その方は、ランナー用のトイレを自宅の前に設置されてはじめは嫌だった。しかし、当日になるとトイレに並んでいる人たちと色々会話が出来て、このイベントに一気に親近感を持ったそうです。そこで、次回からうちのトイレも解放したいから、その手続きはどうしたらいいか?と問い合わせてくれたのです。

また、新聞で目にしたのですが、一人のランナーが寒さと空腹でうずくまっていると、それを見た沿道のおばさんが、自分のポケットマネーでチョコレートを買ってきてくれた。でも手がかじかんで食べられないものだから、その包み紙をあけて、ランナーの口に入れてあげたそうです。ふるさとを持たない、寄せ集めの東京人だとよく言われます。でも本当は下町的な人情がきちんとあって、イベントをすることで共同体意識が呼び覚まされる。すなわちイベントがふるさとづくりになっているのだなと感じました。

PROFILE
東京マラソン事務総長
佐々木秀幸

早稲田大学卒業。1972年開催のミュンヘンオリンピック陸上競技選手団コーチをはじめとして、テレビ報道解説員としてバルセロナオリンピックまで6回連続でオリンピックに関わる。東京マラソン組織委員会事務総長の他、日本陸上競技連盟名誉副会長、アジア陸上競技連盟終身名誉副会長、早稲田大学競走部総監督、顧問などを歴任。

3万人のランナーが一斉に都庁前をスタート。最も興奮に包まれた瞬間のひとつだ。 ©東京マラソン事務局

都市にもたらすもの」

モデレーター
野川春夫　順天堂大学教授

パネリスト
佐々木秀幸　東京マラソン事務総長
犬飼基昭　Jリーグ専務理事
山口泰雄　神戸大学大学院教授

東京マラソンの成功が世界へのアピールになり、ふるさと作りの基礎になったということを、まとめ役として誇りとして感じた次第です。

浦和レッズがもたらした街の「活気」と「誇り」

野川：地域の活性化という点で、浦和レッズ前社長の犬飼さんはいかがでしょうか?

犬飼：私は高校、大学とサッカーをしていて、入社した三菱重工でもサッカー部で選手としてプレーし、引退した後は、三菱自動車に転籍して長く欧州に駐在していました。

欧州で生活をしていると、人々の生活の中で、スポーツの果たす役割の大きさを実感することが多々ありました。欧州の人々はスポーツそのものを観たり、自分でやったりということを素直に楽しんでいた。欧州はいわゆる「文武平等」で、スポーツの社会における地位が非常に高かったのです。

ところが日本を見てみると、「文」がずっとうえで「武」が下になってしまっている。「武」の社会における意味をぜひ示したいと思い、帰国後、浦和レッズの社長に就任しました。

就任当時の浦和レッズはいつも最下位争いの弱いクラブで、私の故郷でもある浦和自体も何の求心力も持たない古い街でした。東京の人には「ださいたま」なんて言われて、住民は浦和に住んでいることを隠すような街だったんです。

そんな時にひとつの転機がありました。ちょうどワールドカップが終わった後、埼玉スタジアムという6万人収容のスタジアムを浦和レッズに使ってもらえないかという話が県からあったんです。今まで使用していたスタジアムに比べると約3倍強収容のスタジアムで、ビジネスとしては非常にリスクがありました。しかし、スポーツの意義を地元の人にわかってもらうためにはあえて山を高くして裾野を広げるべきだと考え、埼玉スタジアムでやっていくことを決めました。

スタジアムを大きくしたことが功を奏し、2年ほど経つと、スタジアムも満員になり、06年にはJリーグのチームとして初めて入場者数が500万人を突破しました。また、優勝争いもするチームになって、06年にはリーグ優勝と天皇杯優勝の2冠という快挙も達成しました。ものすごい躍進です。

それもすべてサポーターのおかげです。彼らもまた、欧州の人々のようにスポーツそのものを素直に楽しんでいます。試合だけでなく、試合が終われば浦和の街に繰り出して、祝勝会や反省会をして多いに盛り上がります。彼らのおかげで浦和の街に活気が出て、地元の人もだんだんと「私は浦和に住んでいるんだ」と自分の街に誇りを持つようになったのです。

私は現在、Jリーグの専務理事として、浦和レッズのようなクラブを日本中に作って行きたい。そのためにいろいろ努力したいと思っております。

誇りある「スポーツ都市」づくりを目指すべき

野川：ありがとうございました。それでは次にスポーツボランティアの研究をされている、神戸大学の山口さん、よろしくお願いします。

山口：専攻はスポーツ社会学で、様々なスポーツイベントのフィールドワーク、「ボランティア」や

PROFILE
Jリーグ専務理事
犬飼基昭

慶応義塾大学卒業後、1965年三菱重工業入社。三菱自動車工業（株）常務執行役員社長付を経て、2002年（株）三菱自動車フットボールクラブ取締役社長就任。2006年より（社）日本プロサッカーリーグ専務理事。中学からサッカー部に所属。高校時代はアジアユース代表。三菱重工業時代は日本サッカーリーグ、天皇杯全日本選手権に出場。

浦和レッズのホームゲームでは6万人ものファンがスタンドを埋め尽くし、会場は赤一色に染まる。

Panel discussion

「スポーツイベントが都市にもたらすもの」

「スポーツと地域振興」などのテーマをやっております。

私がスポーツイベントの研究を始めたのが今から18年くらい前のことです。当時、鹿屋体育大学に勤めていたのですが、地元の放送局がこういうCMを流した。「指宿菜の花マラソン、ボランティア募集」と。

指宿はその市民マラソンの開催によって観光客が戻ってきたそうです。その後、トライアスロンやウォーキングの大会で成功を収め、見事にスポーツ都市として再生したというわけです。

まだ、スポーツイベントにおけるボランティアというものが定着していなかった時代です。ロサンゼルスオリンピックでボランティアが活躍したことは聞いていましたが、地域の市民マラソンでボランティアを公募していることにとても驚きました。それがきっかけでスポーツボランティアの研究を始めるようになったのです。

スポーツの歴史的な流れとして、「するスポーツ」から「みるスポーツ」、そしてこれからは「ささえるスポーツ」とよく言われます。

「ささえるスポーツ」としてのボランティアが本格的になってきたのは90年代に入ってから。特に日本では98年の長野オリンピック・パラリンピックにおけるボランティアが非常に高く評価されています。いまでは規模の大小に関わらず、ボランティアなしではスポーツイベントは成功しないとまで言われています。

ところで、スポーツイベントの話をするときに一番よく語られるのは経済効果です。しかし、これから重要なのは特徴があって、誇りの持てる「スポーツ都市」づくりを目指すことだと思います。この指宿もそうなのですが、スポーツイベントを開催することが、コミュニティの再生化、新しい街づくりにつながっていった。単にイベントの開催を目的にするのではなく、その先にあるものを見据えることが重要です。

市民が発信し、作り上げるスポーツイベントの時代へ

野川：スポーツイベントは新たな共同体意識や地域の活性化、都市の再生をもたらすというわけですね。

では最後に、三人の先生方から今後の展望や現在の問題点など、これだけは強調しておきたいということはありますでしょうか？

山口：スポーツイベントの開催が住民の「する・みる・ささえるスポーツ」の機会を増やすしかけが必要ではないかと思います。東京オリンピックにもこういったものをつくることが大事だと思います。

犬飼：参加型のスポーツイベントはこれから非常に重要なので、積極的にやったほうがいいですね。

日本中で、自分の街でJリーグのクラブをもちたいという都市が50を超えました。自分の街でJリーグのクラブを持って、自分たちの手で街を活性化しようとしている。是非実現に向けて頑張りたいですね。

佐々木：東京マラソン2008のテーマは「環境」。環境にやさしい東京マラソンなのです。選択肢のひとつとしてしか話題になっていないのですが、仮にある日、都内ノーカーデーにしてしまう。そしてその日に東京マラソンを開催する。これはあくまで仮の話ですが、そういったテーマが地域の人たちから出てくることが一番大切。これが都市のもたらす本当のパワーだと思います。

野川：これからのスポーツイベントは市民から発信し市民が作り上げていく、そのようなスタイルで都市を活性化させることがひとつ重要なのかなと思います。みなさん本日はありがとうございました。

PROFILE
神戸大学大学院教授
山口泰雄

カナダ・ウォータールー大学大学院博士課程修了（スポーツ社会学）。1996年から神戸大学教授。文部科学省体力・運動能力調査研究委員、日本スポーツ社会学会理事、日本生涯スポーツ学会理事など兼務。『スポーツ・ボランティアへの招待』（編著）、『生涯スポーツとイベントの社会学』（著書）等がある。TAFISAより、『スポーツ・フォー・オール・パイオニア賞』(2001)。

スポーツイベントと都市政策

スポーツイベントの世界の潮流は「国家威信」から「興楽」へ。日本でも楽しさを演出する企画力、楽しいイベントを開催するための規制緩和などが必要になってきた。

イベント学会会長　堺屋太一

イベントでスターに頼る危険性

最近のスポーツイベントのＰＲは、目玉となる選手にスポットをあて、「ライバル」「挫折」「師弟関係」といった個人の物語に集約することが流行りです。

実は、これは、かなり危険な手法です。目玉の選手が出られなくなったり、活躍できなければイベントは盛り上がりません。すでに万博では、第一次大戦以降は、「珍品と新技術に頼るな」というのが鉄則になっています。

イベントの作り手は、目玉商品が無くても必ず当たる方法を考える必要があります。参考になるのは、1897年から始まり、今では2万人以上が参加するボストンマラソンです。通常、マラソンの目的は競争＝最速選手を選択することですが、ボストンマラソンでは、「大勢の人が走ること」という新しい目的をつくりました。これが大当たりして、ハワイやニューヨークにも広がりました。衰退しかけていたボストンはマラソンで有名になり、活気を取り戻しました。スポーツイベントによる町づくりの好例でもあります。

最近面白かったのは、丸の内を使った「東京ストリート陸上」。日本では、海外に比べて陸上に対する関心が薄い。そこで、朝原宣治選手、為末大選手などが、陸上のおもしろさを伝えるため、また、世界陸上大会のＰＲも狙って、丸の内の路上に50メートルの仮設トラックをつくって技を披露しました。たとえば、棒高跳びを見た観客は、周辺の建物と比べることで、どれだけ高く跳ぶのかを実感できるわけです。

「楽しさ」と「効率」と「安全」は対等

昨年は、東京で3万人もの人が繁華街を走る大規模なシティマラソンが開催され、大変な話題になりました。しかしこのような大規模イベントが、有名な大都市で開催されることはほとんどありませんでした。大都市を使った自転車スポーツも世界で大流行だが、日本には未だにありません。その理由は、警察の規制が厳しいからです。日本という国家の正義は、「安全性」と「効率性」です。ですから、「安全性」「効率性」を妨げることは規制されます。

それに対して、海外では「楽しさ」は「安全性」や「効率性」と並ぶ正義です。ですから、モンテカルロラリー、リオのカーニバルをはじめ、大勢の死傷者が出ることがあるイベントでも、それだけの「楽しさ」があるから中止にはなりません。

オリンピックやワールドカップをはじめとする大規模スポーツイベントも、「国家威信」「都市威信」のイベントから、「楽しさ」重視のイベントに変わりました。その大きなきっかけは、'84年のロス五輪です。ロス五輪では、政治と切り離すために補助金をもらうのをやめました。その代わりにオリンピックの権利を買い取り、コマーシャルをじゃんじゃん流し、聖火リレーの市民ランナーからもじゃんじゃんお金をとった。これが大成功したわけです。これ以降、大規模スポーツイベントはどんどん商業主義になっています。

商業主義で重要なのは、楽しさ、面白さです。人気があがれば、コンテンツの価格、広告料の価格などがあがっていくからです。海外では、イベントに合わせて街中にスポンサーの看板をたてることも当たり前になってきました。今や世界は看板奨励の時代です。

日本でもスポーツイベントを都市政策の起爆剤にするためには、まず「楽しさ」を「安全」や「効率」と対等の正義にすることが重要です。全国に先立って東京が、繁華街を通行止めにして市民マラソンを開催したのは、東京の活力の現れだといえるでしょう。

そしてイベントの企画者は、開催地の人、あるいは参加者がいかに満足を得るかということから、イベント開催の目的を考える必要があります。今後は従来の都市計画のように、まずハードウェアがある、その配置(線引き)から入るのではありません。その時その時、その場その場で「人々の満足は何か」を求めていくことが大切だと思います。

PROFILE
さかいや・たいち
東京大学経済学部卒業後、通産省入省。日本万国博覧会、沖縄海洋博覧会などを手がける。1978年に退官。作家として『油断！』『団塊の世代』『峠の群像』などを執筆。1985年に発表した『知価革命』は、世界最初のポスト近代の経済社会理論として、世界から注目される。。1998年から2000年まで経済企画庁長官。現在、早稲田大学日本橋キャンパス学督。

2007年度総会報告

7月17日(火)、東京グリーンパレスにて研究大会終了後、2007年度総会が開催され、会員97名(委任状含む)の参加を得て審議が行われました。

本年度は、2008年にイベント学会10周年を迎えるにあたって記念事業を準備する活動や、新規会員加入促進のための新たな活動が決まりました。

その他イベント学研究助成やイベント学懇談会も引き続き行われることとなりました。具体的な内容が決まり次第お知らせしますので、ふるってご参加下さることを期待しています。

決算・予算

次の2006年度決算案および2007年度予算案を審議、承認しました。(単位：円)

科目		2006年度決算	2007年度予算
I 収入の部	会費収入　計	9,165,000	9,780,000
	事業収入　計	7,667,019	150,000
	当期収入　計(A)	16,832,019	9,930,000
	前期繰越収支差額	980,306	3,451,573
	収入合計(B)	17,812,325	13,381,573
II 支出の部	事業費　計	9,684,418	4,050,000
	管理費　計	4,676,334	5,860,000
	当期支出合計(C)	14,360,752	9,910,000
当期収支差額(A－C)		2,471,267	20,000
次期繰越収支差額(B－C)		3,451,573	3,471,573

懇親会

研究大会、総会終了後は会場の隣に設けられた会場で懇親会が開催されました。まずは堺屋太一会長の開会のあいさつ。「日本の格式をもって世界をリードするような立派なイベント学を作りたい」と、今後の抱負を語りました。

また、今回は東京オリンピック開催を願って集まった学生たちの団体、「2016年東京オリンピックを望む学生の会」が参加し、活動内容のプレゼンテーションがありました。「学生の会」は、オリンピックデーに東京オリンピック招致委員会と協力して招致イベントを行なうなど、積極的な活動を展開。今後のオリンピック招致活動の中で注目の存在になりそうです。

懇親会には学会員をはじめ、今大会の講師の方々、学生などが多数参加。いたるところから活発な意見交換や談笑の声が聞こえ、会場は賑やかな交流の場となりました。

感謝！感謝！

前イベント学会事務局長　**五十嵐嗣郎**

平成16年７月にイベント学会事務局に入り、会員の交流やイベント学発展へのお手伝いなどに関わり、大変充実した３年１ヶ月を過ごすことが出来ました。皆様方に感謝申し上げます。

事務局に入った翌日が研究大会・理事会・総会だったので、ただウロウロしていたのが、つい昨日のような気がします。川本前事務局長から徐々に事務局作業を引き継いでいく中で、これは大変だと分ってきたのが、会議・会合のセッティング作業です。特にお忙しい堺屋会長や成田理事長がご出席される場合には、一致する日時を見つけるのが一苦労で、何とか日時の調整が取れた時は、心の中でいつも「ヤッター」と叫んだものです。

イベント学構築の環境づくりのために始めたイベント学研究助成やイベント学懇談会も、会員の方々のご協力により漸く軌道に乗ってきたように思います。来年はイベント学会創設10周年を迎える記念すべき年になります。

イベント学構築のために、研究助成や懇談会の場で，研究発表やご意見などをどしどし出していただきたいと思います。

後任の小林事務局長は永年各種イベントに携わって来られ、イベントの真髄を良くご存知の方です。小林事務局長の下で、非力ながら私も１０周年事業という大イベントのお手伝いをさせていただきますので、これからもよろしくお願いいたします。

お名前だけではモッタイナイ！

イベント学会事務局長　**小林政則**

イベント学会は1998年に150人の発起人によって設立され、以来多くの先輩会員の加入により活動が継続されてきましたが、現在の個人会員数は132名と年々減少の傾向にあります。事務局による会員サービスが至らなかった点もありましょうが、参加機会の少なかったことが退会理由のひとつであるならば、学会にとっても会員本人にとっても大変モッタイナイことであり、事務局の今後の重点課題だと思います。

来年設立10周年を迎えるにあたり、事務局では会員の参加機会をより拡充すべく提案してまいりますので、みなさまの貴重な研究成果や知見、ご経験をイベント学発展のためにご提示くださいますようあらためてお願いいたします。今年度より毎月１回は開催してまいります「イベント学懇談会」や「金曜サロン」では、会員同士はもとより一般の学生や若手ビジネスマンとの交流を通してイベントの社会的な役割を広く啓蒙していきます。また「ホームページ」では会員による情報交流の場と提言の機会を拡充し、投稿された論文等はイベント学の体系化に向けて蓄積・活用させていただきます。

現在手元にあります会員名簿には学・官・産各界の発展に貢献されてきた方々のお名前を数多く拝見することができます。イベント学会の財産とも言えるこれらのお名前が単に会員名簿にとどまるだけでなく、様々な学会のイベントやメディアに登場し、次代を担う若者達に強い刺激となりますよう期待しております。

名簿のお名前だけではモッタイナイ！

乾杯のあいさつをする堺屋会長。来年、創立10周年を迎えるイベント学会の抱負を語った。

食事とお酒を交えながら、会員、学生、講演者らが交流を深めた。

ざっくばらんな意見交換や、新たな出会いで懇親会は大いに賑わった。

INFORMATION　事務局からのお知らせ

イベント学会2007年度研究助成受付開始

イベントに関する理論や技術の開発に資するように、2004年度から始めました「イベント学会研究助成」を今年は以下の要領で募集致します。特に中堅・若手研究者、大学院生などからの応募をお待ちしています。

応募資格　助成金交付時点(2007年11月予定)でイベント学会会員であること。個人およびグループで応募できる。

助成金　1件20万円以内

応募締め切り　2007年10月15日(月)

報告書提出締め切り　2008年5月30日(金)

応募方法　申込用紙(学会のＨＰからダウンロードまたは事務局に請求)に必要事項を記入の上、学会あてに郵送・宅配または持参して下さい。

応募先　イベント学会事務局

詳しいことはイベント学会事務局までお問い合わせ下さい
TEL：03-5215-1680　FAX：03-3238-7834　E-mail:info01@eventology.org

交流イベントにご参加ください

●イベント学の体系化をめざして会員参加による「イベント学懇談会」を本年度も開催します。師岡文男理事(上智大学教授)にコーディネーターをお願いし、皆様から「私のイベント学」についてお話を伺いたいと思います。詳細は学会ホームページでお知らせいたします。

●会員と一般の方の交流を深めるために本年度から毎月1回の「金曜サロン」を計画しています。国内外で予定されているイベント情報について主催者やプロデューサーからお話を聞いたり、イベントコンテンツやユニークなイベント関連商品のプレゼンテーションを様々な企業にしていただくことも予定しています。学会事務局にメールアドレスをご登録いただくと毎月ご案内のメールを差し上げます。

イベント学会入会手続き

1)入会ご希望の方は、入会申込書(会員種類別)にご記入の上イベント学会事務局あてご郵送下さい。入会申込書はイベント学会ホームページからダウンロードするか、直接事務局にご請求下さい。

2)申込者について理事会等で審議し、入会を承認された方には入会承認書と振込み案内をお送りしますので入会金(初年度のみ)と年会費を指定の口座にお振込み下さい。

3)これ以降、会報『イベントロジー』や研究報告書、大会、部会などのご案内をお届けします。

イベント学会会費一覧(2007年度／円)

会員種類	入会金	年会費	備考
1)個人会員	5,000	10,000	研究者、実務者などの個人
2)準会員	なし	2,000	大学生、大学院生、専門学校生など
3)自治体会員	20,000	50,000	地方自治体
4)法人会員	(1口)100,000	(1口)100,000	企業、団体などの法人

※法人会員は1口以上

EVENTOLOGY NO.19/2007.Sep
■発行人／堺屋太一　■編集人／宮木宗治　■発行日／2007年９月
■発行所／イベント学会事務局　〒102-0082 東京都千代田区一番町13(一番町法眼坂ビル３F)
TEL：03-5215-1680　FAX：03-3238-7834　URL：http://www.eventology.org/